

顔料プリント手拭製作依頼の手引き^{てぬぐい}

Ver 130228

【はじめに】

当社で主に扱うプリント手拭は、手拭専用のオートスクリーンマシンによる「顔料プリント」という方法です。生地へプリントをした後、熱乾燥仕上げで製作をしています。

プリント手拭の用途としては販売促進（ノベルティグッズ）が多く、比較的短い納期で安価に製作できるため、重宝されております。

顔料プリントの特徴は、細かい線の表現が可能で、^{ちゅうせん}注染よりもシャープな仕上がりになりますが、デザインをする上での制約や、仕上りの限界もあります。

また、^{ちゅうせん}注染のように染料を生地の裏まで通すことはできず、片面プリントになりますので、手染めの味わい深い仕上がりを出すことは苦手です。そして手触りには顔料独自のザラザラ感があり、仕上がり直後には顔料特有の臭いがすることがあります。

つきましては「^{ちゅうせん}注染では製作が難しい細かなデザインを手拭にしたい」「予算の都合で安く手拭を作りたい」というお客様にはぜひこの手引きをお読み頂き、プリント手拭の特性を理解して頂いた上で、製作依頼をいただけますようお願い申し上げます。

なお、製作依頼のうえで、ご指定頂く仕様に関しては、当社「手拭見積依頼フォーム」の中にある「仕様のご説明」で述べさせていただきます。この手引きでは、製作の際の思わぬ問題点に関して説明をいたしますので、合わせてお読みくださいますようお願い申し上げます。

東京和晒株式会社
代表取締役社長 瀧澤一郎

様々な手拭プリントの技法について

プリントには主なものとして「スクリーンプリント（スクリーン捺染）」「ローラープリント（ローラー捺染）」「インクジェットプリント」があります。

スクリーンプリントについては更に「オートスクリーン（機械捺染）」「ハンドスクリーン（手捺染）」があり、着色方法も〔顔料〕と〔染料〕の二種類があります。

【プリント技法の種類】

オートスクリーンプリント（顔料）：標準的なプリント手拭。比較的安価。デザインに制限がある。

オートスクリーンプリント（染料）：顔料特有のザラ付きは無いが、高価である。

ハンドスクリーンプリント（顔料）：少量向けだが裏通しなどの加工が可能である。

ハンドスクリーンプリント（染料）：顔料特有のザラ付きが無いが、高価である。

ローラープリント（顔料）：加工単価は一番安いですが銅板のロール型が高いので1万本以上の大口製作向け。

インクジェットプリント（染料）：フルカラーグラフィックに対応しているが単価が高くなる。

～ 目次 ～

【 1 】 デザイン作成上の注意

- (1) 点の大きさの限界 1 mm以上の大きさが必要
- (2) 線の細さの限界 1 mm以上の太さが必要
- (3) 周囲余白の問題 原則的に周囲余白が約 1 0 mm以上必要
- (4) デザインサイズの問題 生地の種類と用途により巾と長さが異なる

【 2 】 プリント手拭いの問題点

- (1) 色の一致について 目標色と正確な一致が難しい
- (2) 変退色について 多少の変退色がある
- (3) においについて 多少の溶剤臭がする
- (4) デメリット表示について 原則付けない
- (5) 生地難の問題 多少の糸節や織段がある
- (6) 無地（ベタ）部分のムラについて 無地部分はムラになりやすい

本手引き取扱い上の注意について

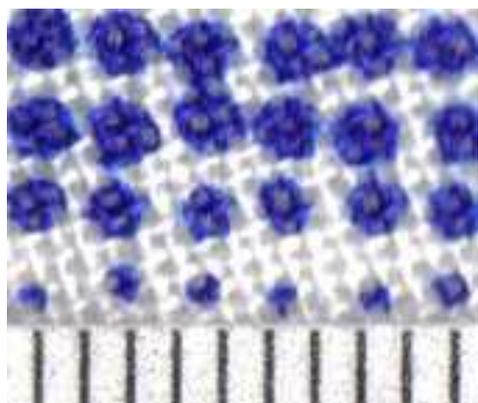
- (1) 本手引き記載内容の全てにおいて、著作権は東京和晒株式会社にあります。
- (2) 許可無く、複製、改変、引用などを禁じます。万一それらしき行為又は表現を発見した時には、法的措置を講じさせていただきます。
- (3) 本手引き記載の内容に基づき、判断または行動をした場合に発生した損害に対して、当社はその責を負いません。
- (4) 本手引きは当社に製作を依頼されるお客様の参考にして頂くことを目的に作成したものであり、他社の基準とは異なる点多々あります。
- (5) 当社にご発注頂いたお客様以外には、内容に関する説明は一切いたしません。

【1】デザイン作成上の注意

(1) 点の大きさの限界 1 mm以上の大きさが必要です

紙への印刷と異なり、布の場合糸のない部分は「穴が開いた状態」ですので、自ずと点の大きさにも限界があります。また、点が小さすぎるとスクリーンのメッシュを顔料が通過できずにカスレが出てしまうことがあります。

現実的には、プリントされる点・白抜きの点ともに1 mm以上のサイズであれば綺麗に表現できます。



《布にプリントした点の拡大写真》
スケールは1目盛り1 mm

例：

1 mmよりも小さな点は布目（糸と糸の隙間の穴）の影響で不安定になります。

また、点同士が隣接しすぎると、くっついてしまう事もあります。

(2) 線の細さの限界 1 mm以上の太さが必要です

点の場合と同様、線の細さにも限界があります。

現実的には色付きの線でも、白線でも1 mm以上の太さがなければ綺麗に表現できません。細い線も太くなってしまい、イメージが崩れる場合があるので注意が必要です。

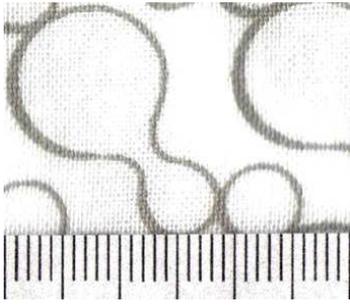


《布にプリントした点の拡大写真》
スケールは1目盛り1 mm

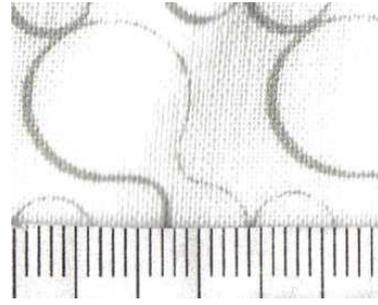
例：白線と白点の限界

白線・白点は、色付き線や点に比べ膨らむ傾向があります。結果的に1 mm以下の線や点は不安定になります。

色付き線の境界



瓢箪型のデザインの片側を1mm以下にして、立体感を出したいデザインでしたが、安全を優先すると、最低約1mmの太さとなり、メリハリが無くなり立体感が表現できませんでした。



そこで、「多少かすれても良い」という条件つきで、再加工しました。結果、線にカスレが出たり切れたりしましたが、お客様には「立体感が出て良かった」と満足して頂けました。

(3) 周囲余白の問題 原則的に周囲余白が約10mm以上必要

スクリーンプリント手拭は、生地を指定の長さ(約90cm・100cm)に切ってからプリントをします。そこで、生地のにせる柄が生地より大きいと、生地を置く台から顔料がはみ出してしまい、生地を汚してしまう原因になりますので、原則的に生地の周囲には約10mm以上の余白(白フチ)が必要となります。また余白の大きさは、生地の置き方で、数mmのズレが生じますので予めご了承下さい。もし、余白無しでのプリントをご希望の場合は、数量500本以上で対応が可能です。その場合、型代金を含めて単価コストもアップします。詳しくは「プリント手拭(余白無し)」参考価格表をご覧ください。なお、余白の部分を取り落として「メロー縫い」という縫製をすることも可能です。

周囲の余白

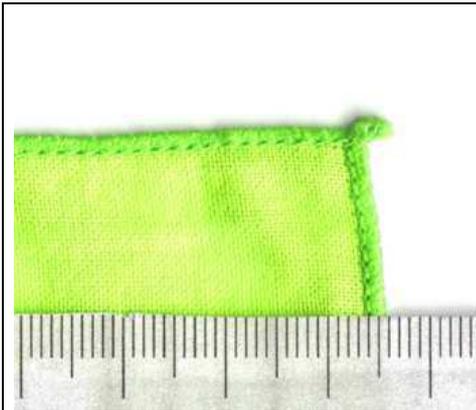


仕上がりの周囲の余白は、正確に何mmとは言えません。カットした手拭生地をプリント台へ置く位置で数mmは間違いなくズレが出てしまいます。この写真では左余白が約7mm、上部の余白は約10mmとなっております。



同じ手拭いの反対側です。こちらは左余白が約14mm、上部の余白も約14mmあります。

余白の部分を切り落として「メロー縫い」という縫製をすることも可能です。



《メロー縫いの拡大写真》

プリント手拭の周囲余白を切り落としながら「メロー縫い」加工をすると端まで色がついたものができます(4辺メロー縫い)。

手拭がカットされている端2辺にメロー縫いをすることも可能です(2辺メロー縫い)。手拭のほつれが気になる場合や、手拭から「ふきん」を製作する場合などにおすすめの縫製です。

メロー縫いの糸は高温に弱い糸なので、アイロン掛けは中温から低温でお願いします。高温の場合糸が溶けることがあります。

その他の方法として【クリア+プリント】という方法があります。

最初に手拭生地を1色「クリア染め(無地染め)」をしてから、周囲余白プリントをすることが可能です。

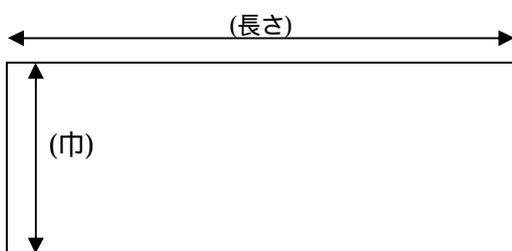


《クリア染め+1色プリント》

クリア染めは染色機を使用するため、手拭の数量で200本以上のロットが必要です。

通常はクリア染めの地色は淡色・薄い色が選ばれ、上からプリントをする色は濃色というパターンになります。クリア染めをした地色は柄の色に影響され、変化して見える場合もあります。

(4) サイズの問題 生地の種類と用途により巾と長さが異なる



一口に「手拭」と言っても様々なサイズがあります。長手方向を「長さ」、そうでない方向を「巾」とします。「巾」は生地の種類によって異なります。また実際のサイズは生地のロットにより、約±1cm～1.5cmの誤差が出る場合があります。あらかじめご了承ください。

【プリント手拭でよく使われる生地の中とその用途】

生地名称	巾	用途および特徴
総理 <small>そうり</small>	約 33 cm	手拭に用いられることが多く通気性が良い。
岡 <small>おか</small>	約 35 cm	手拭に用いられる。総理より表面が滑らか。
特岡 <small>とくおか</small>	約 36 cm	手拭・シャツ・浴衣用、耐久性有り

素材は全て綿100%です。

総理は20番手という太めの糸を使用し、岡・特岡は30番手というやや細めの糸を使用しています。

【プリント手拭の長さとの用途】

長さ	用途
約 90 cm	一般的なサイズ（ただしハチマキ等被り物に使うには少し短い）
約 100 cm	剣道や、お祭りで使うハチマキなどの被り物にはこの長さが必要

長さ100cm以上のプリント手拭は特殊なため、ご希望の際にはご相談ください。

【2】プリント手拭の問題点

（1）色的一致について **目標色と正確には一致させられません**

注染と比較した場合、色見本の目標色へ近づけやすいのもプリント手拭の特徴です。

それでも、紙への印刷と比較すると遥かに目標色より外れて仕上がります。

また顔料プリントの場合、「濃くてはっきりした色」は色調整がやや難しい傾向にあります。もし慎重な色合わせを希望されるお客様は、費用と時間が掛かりますが、見本染めをして頂く事をおすすめします。

（2）変退色について **多少の変退色があります**

顔料プリント手拭でも変退色します。特に、白生地の部分は経時変化で黄ばんでいきます。

黄ばみ対策には、家庭用洗剤（普通は蛍光増白剤が入っている）で洗濯すればかなりの効果があります。

ただし洗濯することによって、顔料が薄くなる傾向にあります。また、強く摩擦する事により顔料部分が落ちる事もありますので注意が必要です。

（3）においについて **多少の溶剤臭がします**

顔料プリントでは有機溶剤で顔料インクの濃度を調整しているため、プリント後の乾燥とベーキングを経ても多少溶剤の匂いが残っている事があります。空気中にしばらく放置すればだいたい消えて行きますが、気になる場合は一度水洗い、乾燥をして下さい。洗濯に際して、ドライクリーニングは厳禁ですのでご注意下さい。

(4) デメリット表示について 原則付けません

顔料プリント手拭に関しましては、注染手拭のようにデメリット表示シールを貼っていません。大きな理由は、廉価版の為、少しでもコストダウンしたい点と、注染ほどの注意点とクレームが無いからです。ただしご希望により、注染手拭と同じシールを貼らせて頂く事も可能です。ご相談下さい。

(5) 生地難きじなんの問題 多少の糸節いとふしや織段おりだんがあります

手拭に使われる、総理や特岡は、20番手や30番手という比較的太い綿糸が使用されています。紡績過程で「コーマ」という、櫛で糸の太さを揃える加工を経ていませんので、糸節よこいとや緯糸を継ぎ足す際に二重になったり、隙間が開いたりする織段おりだんが稀にあります。

当社ではそのような生地難に関する責任は保障できるものではありません。

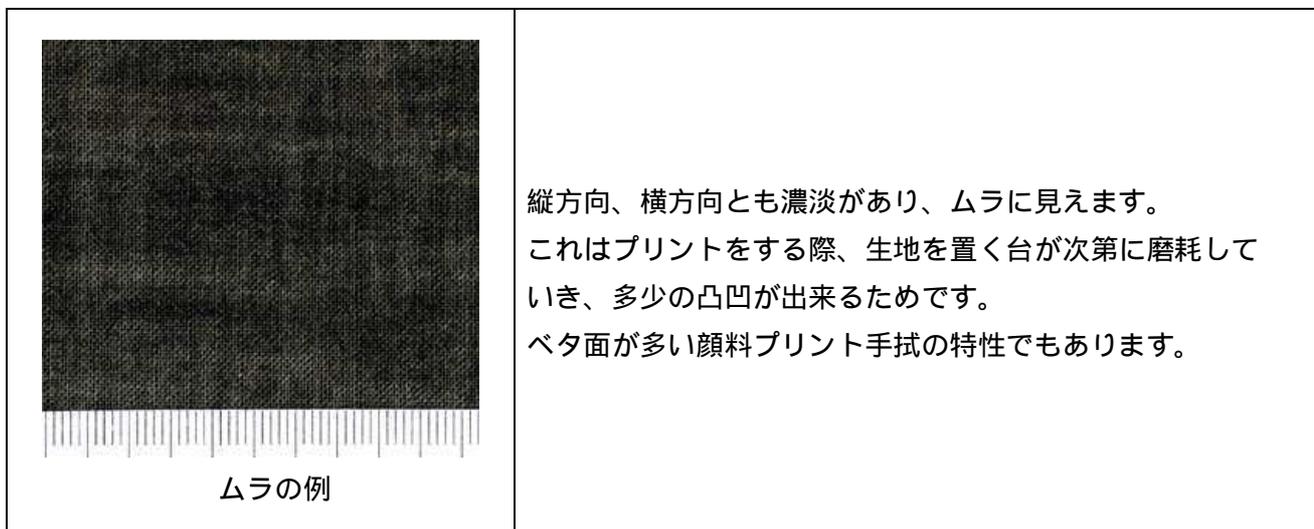
(発生が多い時にはご相談下さい)

このような生地難の問題は、上総理や特岡というワンランク上の生地を使えば、かなり発生率は少なくなります。用途とコストに応じて、生地をお選び下さい。

(6) 無地(ベタ)部分のムラについて 無地部分はムラになりやすい

プリント手拭の場合、広い面積の無地(ベタ)部分が多少なりともムラになります。

これは、顔料をスキージする(生地にこすりつける)際に、生地を置く台がほんの少しですが凸凹していて、微妙な濃淡になって出てしまうのです。



この様なムラの状態も「生地の表情」と受け取って頂ければ良いのですが、ムラが気になるお客様には以下の対策が必要です。

- 1) 無地の面積を少なくし柄を多く入れ、ムラを目立たなくする。
- 2) 無地の部分は、「クリア染め」をして、柄だけプリントする。